

〈書評〉

クレア・マリイ 著

『「おネエことば」論』

(青土社 2013年 210頁 ISBN: 978-4-7917-6756-4 2,000円+税)

吉澤 京助



本書は、日本語とセクシュアリティの研究者であるクレア・マリイ (Claire Maree) によって2013年に書かれたもので、言語学の視点から「おネエことば」について分析した、はじめての本格的な研究である。

まずは、章ごとに内容を紹介します。本書は全六章から構成されており、第一章『「おネエことば」の変遷—越境する『おネエことば』』では、「おネエことば」がメディアと学術研究それぞれにおいて、これまでどのように扱われてきたかを概観している。メディアでは1950年代以降、「おネエ系」が繰り返しブームを巻き起こしており、その背景には「おネエことば」の存在がある。そこで用いられている「おネエキャラのことば」は、従来LGBT¹コミュニティで使われているものとは異なり、一種の役割語になっている。このことが、ステレオタイプ化された「おネエ」像をつくり出し、受け手にとって分かりやすい役割をタレントに付与しているという。

他方、学術研究での扱われ方はどのようなであったか。「おネエことば」は、これまでの言語研究では男性同性愛者が「女ことば」を真似たものと解釈される傾向にあった。つまり、学術領域でもメディアと同様、「おネエことば」はステレオタイプ化されていたと言える。しかし、ある言語を分析するときには、その使用者を属性によって限定せず、そのときの状況や関係によっては誰でも使うかもしれない「言語資源」²として扱わなければならない。また、「おネエことば」の起源として「女ことば」を持ちだすことも、「女ことば」の起源探しが始まり、そこに女性性の表出といった答えを求めることに繋がりがかねないため、注意すべきだ。本書はそうしたバイアスを回避し、「おネエことば」が社会のなかでどのように機能しているかを分析することを目的としている。

第二章『「おネエキャラのことば」の誕生—主流メディアにおける表象』では、「おネエことば」および「おネエキャラ」がマスメディアでどのように受容されてきたかを検討している。「おネエキャラ」という表現は、2004年前後から新聞などの活字メディアで取り上げられるようになった。そこで言及されている特徴は「毒舌」「女性的な行動」などであったが、後に「超越性」や「エキスパート性」³もまた強調されていくようになる。これらの特徴によって規範化された「おネエキャラ」は、女性性の滑稽な写しとしてパフォーマンスされている。そこで用いられる「おネエキャラのことば」は、異性愛規範への挑発や攪乱を目的としない、単なる話術である⁴。

第三章「メイクオーバー・メディアを読み解く」では、「おネエキャラ」タレントがメイクオーバー・メディアにおいて起用されやすい理由について考察している。その理由は二つあり、ひとつはバラエティ性の確保の容易さである。メイクオーバー・メディアは、メイクオーバーの対象者に対して辛辣な批判をしてからその問題点を解決していくという構成をとる。その批判やそこからはじまる指導では

「おネエキャラ」タレントの毒舌さが発揮される一方、「おネエキャラ」タレントが「偽モノ」の女性であることによって、そうした辛辣さも笑いの対象としてバラエティ性に回収されていくのである。

二つ目の理由は、メイクオーバーに「おネエキャラ」タレントのエキスパート性が必要とされることにある。メイクオーバーの対象者となる人は、まず現状の要旨のための劣等感や不幸さを強調される。その不幸を払拭するために、美のエキスパートである「おネエ」の指導が必要とされるのである。

第四章「テロップとして視覚化される『おネエキャラのことば』—書かれること／書かれないこと」は、バラエティ番組でのテロップに着目して「おネエキャラのことば」がどのように表象されているかを分析した章である。「おネエことば」に限らず、タレントが話す言葉をテロップとして映し出す場合には、言語内翻訳⁵の作業が必要になる。たとえば「おネエことば」のテロップには、わざと男性性を強調するような色・言葉を選んでテロップを入れることで、「おネエキャラ」のステレオタイプ性（実は男性である、という前提）を高める効果が生まれる。

第五章「文章化された『おネエキャラのことば』」では、文章メディアにおいて「おネエキャラのことば」がどのように表象されているかを述べている。バラエティ番組のテロップのような装飾が不可能なため、文章メディアでは記号の多用、カタカナとひらがなを混合したかたちでの語尾変形によって、ジェンダー規範からの「逸脱性」を確保したまま「おネエことば」を文章化している。また、本の装丁でも色づかいをピンクと白の組み合わせにするなど、装飾性を高めることによって、「おネエ」のイメージをかたちづくっている。

第六章「『おネエことば』の行方—反復されることば」において著者は、「おネエことば」の政治性について考察している。この章で取り上げられているのは、『ゴールデン・エッグス』というCGアニメに登場する双子の「おネエキャラ」である。この双子の会話は、そのパロディとしての完成度の高さゆえに、テロップや装飾的な外見がなくとも「おネエ」として認識されうる。ここでは生身のLGBTはもはや関係なく、「おネエキャラのことば」自体がパロディ化され、商品化されているのである。そのようなことばは、クィアな可能性を持ちつつも、大手メディアの内側で異性愛規範に加担することになっている。

本書の重要な点の一つは、「おネエことば」をゲイ男性という特定の 카테고리から切り離して考察している点にある。これまで、「おネエことば」といえばLGBTコミュニティで当事者が用いる「女ことば」を真似たものと認識されてきた。そうした先入観から距離を取って分析・解釈する意味では、本書のように分析対象をメディアに絞ることは有効だと思われる。というのも、「女ことば」と「男ことば」という二項対立の軸が明確に存在するなかで、「おネエことば」がどのように作動しているのかを分析することが可能になるからである。LGBTコミュニティでは「女ことば」や「男ことば」を話していたとしても、それが必ずしも男女二元論の安定を意図しているかは分からない。しかし、マスメディアの場合には男女の二項が明確に分かれているものとされ、「女ことば」は女性、「男ことば」は男性、「おネエキャラことば」を話すのは、基本的に「おネエキャラ」タレントに固定されている。これは、当事者コミュニティのなかでは難しい「おネエことば」が異性愛規範へ加担するしくみの分析には有効な空間であろう。

第二に、メイクオーバー・メディアのもつ規範化の効果とそこでの「おネエキャラ」タレントの役割を明らかにしたことは重要である。メイクオーバー・メディアでは対象者の不幸さのものはすべて、対象者の容姿に求められる。この段階で、容姿に対する規範が強く反映されていることがわかる。次に、

その容姿を「改善」するために「おネエ」タレントがエキスパートとして関わるわけだが、ここでは「おネエ」が指導者であることによって、対象者が必要以上に傷つかなくて済むという構造がある。「おネエ」に対して性別での優位さを確保している対象者および視聴者は、彼／女らの言葉がどんなに辛辣であっても受け止めたり、受け流すことができるため、バラエティ番組として成立するのである。

ところで、本書で分析の対象となっているのはメディアにおける「おネエ（キャラの）ことば」であった。たしかに「おネエことば」はLGBTコミュニティから枝分かれしたものであるが、メディアという特殊空間において変容した部分もある。著者が調査したLGBT当事者からは、メディアでの「おネエことば」はコミュニティでの「おネエことば」とかなり異なるという声もあったようである。それでも、「おネエキャラのことば」が2000年代からブームになっているならば、コミュニティに属していないLGBTにとって、「おネエことば」は異なった規範化作用を持っていると考えることはできる。

また、本書の結論では、メディアでの「おネエことば」が現状では異性愛規範の強化に加担しているということだった。それは様々な要因によるところだが、クィア性を取り除かれてしまった「おネエことば」には、すでに攪乱の可能性は残されていないのだろうか。「おネエことば」が変形されてしまったのならば、その変形した「おネエことば」を用いて新たな戦略をたてることが、大手メディアの異性愛主義的性格に対する抵抗になるかもしれない。

本書は、これまでほとんど行われてこなかった「おネエことば」の研究について、いくつかの重要な論点を提示していた。なかでも私が着目したのは、「おネエキャラ」タレントが、ジェンダー規範の外側の人と認識されているということである。エキスパート性や女性らしさといった、本来ならば優れた（と見なされる）性質は、その人が「おネエ」という属性にあるとなった瞬間、いっそう彼／女の「逸脱性」を高めるのである。さらに、彼／女らを「逸脱した」存在と規定することで、彼／女らが抱えている「おネエ」であるが故に生じる問題を、彼／女ら自身の問題として追いやってしまう効果もある。「当事者のみの問題として扱われているだけでは、マジョリティ側には変化は生じない」（マリイ 2013、p.191）という著者の言葉は、この現状を正確に捉えていると言える。

本書は日本ではじめての「おネエことば」に関する研究をまとめたものである。それも、一般にもたれている「おネエことば」＝ゲイ男性の言葉という図式を見事に打ち崩し、このことばが持つ面白さと危うさを明確に示している。今後、ジェンダー／セクシュアリティ研究の視座からことばのイメージを分析するために、確実に重要な一冊になるだろう。

参考文献

三橋順子（2008）『女装と日本人』講談社

註

- 1 LGBTとは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をとった略称。ただし、実際にはこの4カテゴリー以外のセクシュアリティも包括して、セクシュアル・マイノリティの総称としても使われる。本書では後者の意味で使用されている。
- 2 本書では、「話し手自身のアイデンティティや社会性、またはその場の関係性を構成する言語単位や要素を意味する」（マリイ 2013、p.33）。つまり、あることばが「ゲイ男性」や「女性」など特定のカテゴリーに属する人にもみ用いられるもので

はなく、場・時・関係によっては誰にでも使用可能な資源と見なすこと。

- 3 強調される「超越性」や「エキスパート性」の多くは、美容や華道など女性性のイメージに附帯するものである。
- 4 ゲイ・コミュニティにルーツをもつ「おネエことば」は、異性愛規範との差異化のために用いられる。一方、女装者の使用することばは「本物の女性」を手本とする（三橋 2008、p.288。メディアにおける「おネエキャラのことば」では、この区別が見えなくされている（マリイ 2013、pp.58-59）。
- 5 タレントのセリフのうち、どのことばを文字に起こすか、どの単語を強調・色付けするかを選択すること。

（よしざわ・きょうすけ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻博士前期課程）